

- 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
- 郷土をもっと好きになろう

一生をかけた研究 その 成果は今も生き続ける

たに がわ こと すが
谷川士清

谷川士清（1709～1776）は江戸時代中期の国学者で、同じ国学者で松阪出身の本居宣長より20歳年上にあたります。「恒徳堂」とよばれた医院の長男として生まれ、医者のかたわら「洞津谷川塾」や「森蔭社」とよばれた塾や道場を開いて門人に学問を教えました。



谷川士清（津市教育委員会提供）

彼の研究の一つに『日本書紀』の研究があり、注釈書である『日本書紀通証』を著しました。その第1巻の付録に『倭語通音』といわれる動詞の活用表を著しています。また多くの書物の研究を続ける中で、言葉を50音順に整理し、日本初の本格的な国語辞典である『和訓栞』全93巻を編集しました。方言や外来語まで含むほど語彙が多く、出典や用例も多く載せられ、現代の国語辞典のもとになった本でした。

旧宅と墓が国の史跡に指定されていて、旧宅は津と伊賀上野を結ぶ伊賀街道沿いの八町にあり、当時は街道沿いに商店が建ち並んでいました。1775（安永4）年銘の瓦が残っていて、その頃建て直されたか、新築されたものと思われます。



『和訓栞』版本と自筆稿文
（石水博物館提供）



学習のめあて

谷川士清は、本居宣長、橘守部とともに三重を代表する国学者の一人です。士清は、町医を営む家に生まれ、幼い頃から家業を継ぐため勉学に励み、21歳の頃からおよそ5年間京都で医学を学びました。京都から帰郷した士清は医者となり、地域・近郊の人々の信頼を受けました。さらに、医業のかたわら学問にもうちこみ、二十数年間にわたって『日本書紀』の研究に熱心に取り組みました。『倭語通音』や『和訓栞』は、日本のみならず海外の多くの人たちに影響を与え、日本語や日本を理解するために大きな役割を果たしました。

また、士清が亡くなってから110年後に、士清の子孫の人たちが財産をなげうって、『和訓栞』を完成させました。

士清の長年にわたる努力の成果について話し合みましょう。また、士清の子孫の人たちは、なぜ士清の取り組んだ研究を引き継ごうとしたのでしょうか。士清とその子孫の人たちが、困難な目標に向かって努力した生き方について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 谷川士清は、どのような研究をしたのでしょうか。
 - 2 谷川士清の研究は、いろいろな人に役立つものとなりました。それはどのようにいかされたのでしょうか。
 - 3 長年取り組んできた『和訓栞』を本にする前に、病気で亡くなった谷川士清は、どんな気持ちだったのでしょうか。
 - 4 谷川士清の死後、『和訓栞』はどうなったのでしょうか。
 - 5 谷川士清の思いを、その子孫の人たちはどのように考えていたのでしょうか。
 - 6 一生をかけて研究を続けた谷川士清の生き方について考え、話し合みましょう。
 - 7 伝統や先人から引き継いできたもので、これからも大切に残したいものや誇れるものに何があるか調べてみましょう。
- ☆ 第1部の「ここが私のふるさと（P120～123）」を活用し、自分の郷土を見つめ直し、郷土のために自分は何ができるか考えてみましょう。

士清さんの学問と研究

京都から帰った士清さんは、「養順」という号をつけて町医者をしてながら、国学の研究にはげみました。また、自宅で「洞津谷川塾」を開いて、たくさんの人を教えました。

国学というのは、日本の古い書物を通じ、古くからの日本人の考え方などを研究するもので、松阪の本居宣長さんがよく知られています。士清さんは宣長さんよりも20歳ほど年上で、国学研究では宣長さんの先輩にあたります。

士清さんの国学の研究のひとつが、古い時代の日本の国の歴史の本『日本書紀』をわかりやすくするために説明を加えることでした。この研究は、二十数年間も続けられ、のちに『日本書紀通証』(全35巻)としてまとめられました。これは大変な努力のいる研究で、学者としての士清さんの名を高めました。

さらに、その中の第1巻付録である『倭語通音』は、わが国最初の「動詞活用表」となりました。これを読んで感心した宣長さんは士清さんに手紙を出し、ふたりの間に学問の交流がはじまりました。



倭語通音

士清さんは日本語を研究する中で、言葉の一つひとつのカードに書き、その意味や使い方を詳しく記入していきました。こうして集まった約2万1千にも及ぶ言葉を整理して、辞書を作りました。これが有名な『和訓栞』で、全93巻にまとめられています。この辞書はわが国最初の本格的な五十音順(あいうえお順)の国語辞典で、のちに日本語を勉強する人たちによって、大変参考になりました。

士清さんは、長年にわたって『和訓栞』の準備をし、全部を書き終えていよいよ本にしようとしたとき、病気のために亡くなってしまいました。1776(安永5)年10月10日のことでした。

その後、『和訓栞』は、士清さんの遺志をついだ子孫の人々が本にしました。完成したのは1887(明治20)年で、士清さんが亡くなってから110年後のことでした。その頃は今のようない印刷機械がなく、大変な時間とお金がかかりました。谷川家の人たちは、家の財産をなげうって『和訓栞』を完成させたのです。

苦勞の末に完成した『和訓栞』は、外国の人が日本語を勉強するときにも役立ちました。江戸時代の終わり頃、長崎にいた医師シーボルトが帰国する時に、幕府の許可を得て持ち帰った5種類の辞書のうち、後にオランダ人学者のホフマンにより、『和訓栞』だけが『日本文典』に取り上げられました。

出典：パンフレット「日本ではじめて五十音順の国語辞典をつくった谷川士清」
(2009 谷川士清生誕300年記念事業)